

私の歯周治療法の選び方

“Technician knows how, Doctor knows why. お前たち大学院生は、とにかく新しい材料を、とにかく新しい技術を、そして Dr.〇〇のようなビッグな外科を望む。その結果、クリニックにはトラブルが溢れている。今はそれでもいい。それも経験だし、どうせお前たちはあと2年もすればここからいなくなる。だが専門医となり外に出ればそうはいかない。今後新しい材料やテクニックが世に出てくる。そしてその時に専門医としてそれらの評価を下せなければならない。使う材料とテクニックは何か？ なぜそれらを使うのか？ 使っても大丈夫だと言えるのか？ 他に方法はないのか？ それが私が教えようとしていることである。”

私が米国の大学院にいたときの教授の言葉である。

大学院を卒業して10年が過ぎた。私は日常診療でこの言葉を忘れたことはない。できる限り予知性の高い歯周治療を行ってきたつもりである。そしてまた新しい材料に対しても慎重に評価を下して使用しているつもりである。

いくつかの歯周治療例を通じて私の判断をお示ししたい。